

David Graeber

BULLSHIT JOBS

ブルジョア的でもいい仕事の理論

デヴィッド・グレーバー

酒井隆史
芳賀達彦
森田和樹 訳

岩波書店

目次

序章	ブルシット・ジョブ現象について	1
第一章	ブルシット・ジョブとはなにか？	17
第二章	どんな種類のブルシット・ジョブがあるのか？	49
第三章	なぜ、ブルシット・ジョブをしている人間は、 きまって自分が不幸だと述べるのか？（精神的暴力について、第一部）	99
第四章	ブルシット・ジョブに就いているとはどのようなことか？ （精神的暴力について、第二部）	141
第五章	なぜブルシット・ジョブが増殖しているのか？	197
第六章	なぜ、ひとつの社会としてのわたしたちは、 無意味な雇用の増大に反対しないのか？	253
第七章	ブルシット・ジョブの政治的影響とはどのようなものか、 そしてこの状況に対してなにをなしうるのか？	317

謝辞

365

原注

367

訳者あとがき

405

参考文献

刻な精神的傷痕を刻みこんでいるのではないだろうか？　だが、もしそうだとすると、この問題についてはだれひとりとして語ってこなかったようにみえる。仕事にひとが満足しているかどうかについての調査は豊富にあった。「けれども」自分の仕事が存在に値すると感じている否かという調査は、わたしの知るかぎり皆無であった。

わたしたちの社会が、だれも語りたがらないような無益な仕事であふれているという可能性が、まったくありえないとおもえなかった。仕事というテーマはタブーに満ちているからだ。大半の人間が自分の仕事を好んでいないという事実や、仕事に行かない口実を欲してやまないという事実でさえ、それをほんとうに認めることは、テレビではあつてはならないことだと考えられている。たまに、ドキュメンタリーやスタンダップコメディではめかされることは許されるかもしれないが、まちがいにニューズではアウトである。わたし自身、このようなタブーを目の当たりにしている。それはこんな出来事だった。わたしは以前、ある活動家のグループでメディア担当者として活動していたことがある。そのグループは、国際経済サミットに対する抗議の一環として、ワシントンDCの交通システムを停止させる市民的不服従の運動を計画しているとの噂が立っていた。サミット開催までの数日間、アナキストらしき人間とみなされると、上機嫌の公務員が近寄ってきて、月曜日に自分たちが仕事に行かなくてもよいというのは本当かどうかたずねてくるのであった。けれども時を同じくして、テレビの取材班は几帳面にも市役所職員たちから出勤できないのは悲しむべきことであるとの言質を引き出していたのである——そのようなコメントをする者が先ほどの職員たちと同一人物であったとしても、わたしはおどろかなかつただろう。というのも、取材がテレビで使われるにはなにをいえばいいのか、かれらはよくわかっているからである。こうした問題について、本当に感じていることを自由に——少なくとも公に——しゃべれるとはだれも感じてはいないようだ。

わたしの仮説はありえないものではなかったのだが、しかし、本当のところはわからなかった。ある意味わたしは、ある種の実験として、その小論をしたためたのだ。いったいどのような反応が返ってくるのか、わたしには興味があった。

以下の文章が、二〇一三年の八月号にわたしの寄稿したものである。

ブルシット・ジョブ現象について

一九三〇年、ジョン・メイナード・ケインズは、二〇世紀末までに、イギリスやアメリカのような国々では、テクノロジの進歩によって週一五時間労働が達成されるだろう、と予測した。かれが正しかったと考えるには十分な根拠がある。テクノロジの観点からすれば、これは完全に達成可能なことから、ところどころにもかかわらず、その達成は起こらなかった。かわりに、テクノロジはむしろ、わたしたちすべてをよりいっそう働かせるための方法を考案するために活用されてきたのだ。この目標のために、実質的に無意味な仕事がつくりだされねばならなかった。とりわけヨーロッパや北アメリカでは、膨大な数の人間が、本当に必要ないと内心考えている業務の遂行に、その就業時間のすべてを費やしている。こうした状況によってもたらされる道徳的・精神的な被害は深刻なものだ。それは、わたしたちの集団的^{コレクティブ}な魂を毀損している傷なのである。けれども、そのことについて語っている人間は、事実上、ひとりもない。

ケインズによって約束されたユートピアは——六〇年代には、依然として熱望されていた——どうして実現しなかったのか？　現在の一般的な説明は、消費主義の大幅な増大をケインズが計算に入れていなかったというものである。つまり、労働時間をもっと少なくかおもちやと娯楽をもっと多くの選択肢を与えられたならば、わたしたちは総じて後者を選びとってきたというのだ。この筋書きは道徳劇^{モラル・ドラマ}としてはもつともらしいが、少し考えただけでも真相でないことがわかる。なるほど、一九二〇年代から、無数のあたらしい仕事と産業が際限なく生みだされつづけるのをわたしたちは目の当たりにしてきた。しかし、それらの仕事のうち、寿司やiPhone、おしゃれなスーパーカーの生産や流通にかかわっているものは、ごくわずかなのだ。だとすれば、これらのあたらしい仕事とは、いったいなんなのか？　アメリカにおける一九一〇年と二〇

○〇年の雇用を比較する報告から、はっきりと事態を把握することができ(なお、イギリスにおいても、ほとんど同様の状況が読みとれることを指摘しておく)。前世紀を通じて、工業や農業部門においては、^{ドメイン・サービス・ユーザー}家内使用人〔奉公人〕として雇われる働き手の数は劇的なまでに減少した。同時に「専門職、管理職、事務職、販売営業職、サービス業」は三倍となり、「雇用総数の四分の一から四分の三にまで増加した」。いいかえれば、予測のとおり、生産に携わる仕事は、そのほとんどがすっかり自動化されたのだ(たとえば工業労働者の人口を地球規模で数えあげたとしても——そこには中国やインドで苦役に就いている人間が多数ふくまれているもの——やはり、そのような労働者が世界の人口に占める割合は、かつてほどには高くない)。

しかし、労働時間が大幅に削減されることによって、世界中の人びとが、それぞれに抱く計画や楽しみ、あるいは展望や理想を自由に追求することが可能となることはなかった。それどころか、わたしたちが目当たりしてきたのは、「サービス」部門というよりは管理部門の膨張である。そのことは、金融サービスやテレマーケティング〔電話勧誘業、電話を使って顧客に直接販売する〕といったあたらしい産業まるごとの創出や、企業法務や学校管理・健康管理、人材管理、広報といった諸部門の前例なき拡張によって示されている。さらに、先の数字は、こうしたあたらしい産業に対して管理業務や技術支援やセキュリティ・サポートを提供することがその仕事であるような人びとをすべて反映するものではない。ついでにいうと、多数の人間がその時間の大半を仕事に費やしているがゆえに存在しているにすぎない数々の付随的な産業(飼犬のシャンプリー業者、二四時間営業のピザ屋の宅配人)も反映されていない。

これらは、わたしが「ブルシット・ジョブ」と呼ぶことを提案する仕事である。

まるで何者かが、わたしたちすべてを働かせつづけるためだけに、無意味な仕事を世の中にでっちあげているかのようだ。そして、謎があるとしたらまさにここなのである。資本主義においては、こんなことは起きようがないと想定されているのだから。たしかに、ソ連のような古くさい非効率的な社会主義国家

においては、雇用が権利とも聖なる義務ともみなされたため、その体制は必要なだけの数々の仕事をでっちあげなければならなかった(これが、ソ連のデパートでは一切の肉を売るために三人の店員が必要とされた理由である)。しかしむろん、まさにこれこそ、市場の競争が解決するはずの問題なのである。経済理論によれば、本当は雇う必要のない労働者に大枚をはたかすなど、少なくとも、利潤追求をおこなう企業が最もしそくないことである。だが、どういうわけか、そのような事態が起こっているのだ。

企業による容赦のない人員削減がすめられるなかで、解雇と労働強化がふりかかっていたのは、きまつて、実際にモノを製造し、運送し、修理し、保守している人びとからなる層であった。けれども、だれもまったく説明できない不思議な錬金術によって、有給の書類屋の数は、結局のところ増加しているように見える。そして、ますます多くの被雇用者が、気がつけば、ケインズが予測したように週一五時間を効率的に働くどころか——実際には、ソ連の労働者たちと大して変わらず——週に四〇時間、あまつさえ五〇時間も書類作成にいらしむ、そして、残された時間を自己啓発セミナーの開催や出席、Facebookのプロフィール更新、TV番組のボックス・セットのダウンロードに費やしているのである。

その答えは、あきらかに経済上のものではない。道徳上かつ政治上のものである。自由な時間を獲得した充足的で生産的な人びとを、支配階級は死活的脅威であると認識するようになった(一九六〇年代にこの状態に近づきはじめたとき、なにが起こりはじめたか考えてみよう)。労働はそれ自体が道徳上の価値であるという感性、目覚めている時間の大半をある種の厳格な労働規律へと従わせようという人間はなんの価値もないという感性は、そんなかれらにとって途方もなく都合のよいものだったのだ。

以前、イギリスの大学の学部で、際限のないようにみえる管理責任の増大をまざまざと目の当たりにしたとき、ひとつの地獄の可能性がいまみえた気がした。その地獄とは、自身の時間のほとんどを、好きなわけでもこれといって得意でもない仕事に投入している諸個人の集合体である。いわば、かれらは腕の立つ家具職人として雇われたはずなのに、魚のフライの調理に膨大な時間を捧げるよう求められている。ところが、

そんな仕事は、本当のところ必要などない——少なくとも、フライにしなければならぬ魚の数はごく限られている。けれども、どうしたものか、かれらはみな、同僚の一部が「本業である」キャビネットの製造に時間を割いていて、魚を揚げる責任が公平に分配されていないのではないかとという反感(resentment)で頭がいっぱいになっている。そのため、まもなくすると、手ひどく調理された大量の魚の山が仕事を際限なく埋めつくし、ついには、やっける仕事のほぼすべてが魚の調理と化してしまふのである。

これは、わたしたち自身の経済における、道徳上の力学をかなり正確に描写しているようにおもわれる。ところでわたしは、こうした議論がただちに異論にぶつかるだろうことは了解している。「どの仕事かほとんどに「必要」だなんてどうしてあなたにいえるんですか？　そもそも「必要」ってなんですか？　あなたは人類学の教授らしいけど、それってなんのために「必要」なんですか？」というわけだ(実際タプロイド紙の読者諸氏の多くは、わたしの仕事こそ不要な社会的支出そのものだとして受けとめているだろう)。そして、あるレベルにおいては、これはあきらかに真実である。社会的価値の客観的な尺度など、ありはしない。

自分は世の中に意味のある貢献をしていると確信する人間に対して、本当のところきみは貢献なんかしていないよとあえて語るつもりは、ここでは毛頭ない。だが、自分の仕事が無意味なものだと本人が確信しているならばどうか。少し前、わたしは、一五歳の時以来、顔を合わせる機会のなかった同級生と連絡をとった。おどろいたことに、かれはこの間、作詞家となり、それからとあるインディー系ロックバンドのフロントマンになっていた。わたしは、歌っている人間が、実は自分の知人とはつゆ知らず、かれの曲のいくつかをラジオで耳にしていたのだった。かれの才能はめざましいもので、その仕事の世界中の人びとの人生を輝かせよりよいものにしていたのはまちがいない。けれども、数枚のアルバムの不振のち、かれは契約を失い、生まれたばかりの娘と負債に頭を抱えるようになり、結局、かれいうところの「ゆくあてを見失った多数の人間がたどりつくデフォルトの選択……」をするはめになった。それは「……ロースクール、だな」。現在、かれはニューヨークのそうそうたる企業で顧問弁護士として働いている。そのかれが、自分の仕事が

まったく無意味なものであり、世の中になんの貢献もしておらず、みずからの評価において存在しないほうがましだと率先して認めたはじめての人間だった。

ここではたたくさんの問いを立てることができよう。さしあたって、会社法の専門家に對するはてしのない需要が生みだされるいっぽうで、才能ある作詞家やミュージシャンに對してはごく限られた需要しか生まれないという事態は、わたしたちの社会についていったいなにを物語っているのか、と問うてみよう(解答Ⅱやりとりされる富の大半を人口の1%の人間が掌握しているとすれば、わたしたちが「市場」と呼ぶものが反映しているのは、ほかならぬかれらこそが有益ないし重要だと考えていることだからである)。とはいえ、無意味な仕事に就いている人びとの多くが、結局のところ、そのことに気づいているということもみえてくる。実際、わたしがこれまで会ったことがある企業の顧問弁護士のなかに、自分の仕事がブルシットなものだと考えていないような人物がいるかどうか定かではない。先ほどあげた、あたらしい産業のほとんどのについてもまったく同様である。それらの人びとは、こういう有給の専門職階級の一群なのである。つまり、もしもパーティーで出会って、あなたがなにか面白そうなこと(たとえば人類学者とか)をしていると認めたなら、なんの仕事をしているかについての会話のやりとりすら、絶対に避けたがるだろう。そして、二、三杯の酒がはいったあとで、やおら、自分の仕事が本当はどれほどバカげていて、無意味なものであるかという長い長い愚痴がはじまるのだ。

ここには深遠なる精神的暴力がひそんでいる。自分の仕事が存在しないほうがましだとひそかに感じているようなとき、かりそめにも労働の尊厳について語ることなど、どうしてできようか。深い怒りと反感の感覚を生みださずに、どうしていられようか。とはいえ、その支配者たちが、人びとの怒りの矛先をまさしく意味のある仕事をする人たちへと仕向けることでうやむやにしてきた——魚を揚げる者たちの事例におけるように——というのは、わたしたちの社会の奇妙な風潮である。たとえば、わたしたちの社会では、はつきりと他者に寄与する仕事であればあるほど、対価はより少なくなるという原則が存在するようである。くり

返せば、客観的な尺度をみつけることは困難である。しかし、なんとなく感じとるためのかんたんな方法はある。ある職種^{クラ}の人間すべてがすっかり消えてしまったらいいだろうか、と、問うてみることはある。かりに看護師やゴミ収集人、あるいは整備工であれば、もしも、かれらが煙のごとく消えてしまったら、だれがなんというが、その結果はただちに壊滅的なものとしてあらわれるであろう。教師や港湾労働者のいない世の中はただちにトラブルだらけになるだろうし、SF作家やスカ・ミュージシャンのいない世界がつまらないものになるのはあきらかだ。ただ、プライベート・エクイティ¹〔特定の企業の株を取得し、その企業の経営に深く関与して、人員削減などによって企業価値を高めた後、売却することで収益を得る〕CEOやロビイスト、広報調査員、保険数理士、テレマーカー、裁判所の廷吏、リーガル・コンサルタントが同じように消え去ったとして、わたしたちの人間性がどのような影響をこうむるのかは、わたしにはあまりはつきりしない¹（いちじるしく改善するのではないかと疑っている人間は数多い）。にもかかわらず、もてはやされる一握りの例外（医師）を除いて、その原則はおどろくほど当てはまっている。

さらにいっそう倒錯したことに、これが物事のあるべき姿だという感覚が広範に浸透しているようにみえる。これが右翼ポピュリズムの力強さのひとつの秘密だ。そうした感覚を、労働争議のさいにロンドンを麻痺させたとして、地下鉄労働者への怒りを複数のタブロイド紙が煽り立てた事例にみることができ。すなわち、地下鉄労働者がロンドンを麻痺させることができるというまさにその事実が、かれらの仕事を実際に必要とされていることを示している。しかし、この事実こそ、まさしく人びとを苛立たせた一因であるようなのだ。共和党議員が学校教員と自動車工に対する反感を動員することにいちじるしい成功をおさめてきたアメリカでは、それはいつそうはつきりしている（そして意味深なことに、この反感が、実際に問題を生じさせている学校^{スクール・アドミニストレーター}^{*1}管理者や自動車産業の経営陣^{エグゼクティブ}^{*2}に対してむけられることはなかった）。「だって、きみたちは子どもに勉強を教えることができるじゃないか！ 車の製造ができるじゃないか！ きみたちは本物の仕事をもっているじゃないか！ このうえ、あつかましくも中産階級なみの年金や医療まで期待する

というのか？」と、いわんばかりに。

もしも何者かが仕事の機構を、金融資本の権力を維持することに完璧に適合するよう制度を設計してきたのだとするなら、これ以上の仕事ぶりはなかなか望めまい。実質^{リアル}のある仕事をもった生産的労働者は、容赦なく苦しめられ搾取される。それ以外の人間たちは、万人から罵倒される怯えた失業者からなる層と、基本的に報酬を与えられてなにもしないという、より大きな層とに分断される。後者は支配階級（マネジャー^{*4}、

*1 ここでいうスクール・アドミニストレーターは、日本で直接に該当する役職の語彙としては存在していないようにおもわれる。そこには小中学校の校長や副校長や大学におけるさまざまな役職もふくまれるが、日本とは異なり必ずしも教員の経験を必要とせず、たいてい学位を必要とする学校の管理運営全般にかかわる専門職である。第五章の訳注2も参照。

*2 エグゼクティブは、一般的には企業において中間管理職の上位に属する階層を指している。あるサイト上の解説では「ビジネスにおけるエグゼクティブとは、一般に企業における上級管理職、それらの職に就く人または、それらの職に似合う高級な雰囲気^{雰囲気}を形容する言葉として使用されます。ビジネスエグゼクティブ、チーフエグゼクティブなどは企業の上級管理職を指します」(https://chevy.jp/businessman/508)とされている。ここで「高級な雰囲気」とあるように、エグゼクティブは「お偉方」「ハイス」といったあやふやな空気を指すこともある。また、このサイト上の短い定義のなかでも、「上級管理職」というチームが、エグゼクティブ全体とエグゼクティブ内部のさらなる階層を指す二重の意味であらわれている。このようにエグゼクティブに一義的な意味を与えることはむずかしい。ここでは、経営陣、重役、幹部社員、お偉方など、文脈によって訳し分け、適宜、ルビをふることにする。また、このあとの議論で（イヤというほど）わかるように、この用語のみならず、ビジネス用語は、それこそ近年の「ブルシット化」のなかで、空疎に濫用され、はてしのない増殖をみせている。そのようなニュアンスのばあい（そして日本語に意味を画定すると原語の括りが失われると判断されるばあい）カタカナのままにしている。

*3 本書ではブルシット・ジョブと対照的な仕事を指すものとして、real jobやreal workという用語が頻出する。本物の仕事、現実的な仕事、実際の仕事など、日本語としてはさまざまなニュアンスがあるが、基本的に、有益であり目的がある（とみなされている）仕事を意味している。

*4 マネジャーも「経営者」にとどまらない幅広い含意をもっている。支配人、経営者から、支店長、部長、管理職などなど、たんなる組織や部署のトップにあてられるものではない。またこれもアドミニストレーターやエグゼクティブと同じく、ブルシ

アドミニストレーターなど——とりわけ、その金融の化身——の目線と感性に同化するように設計された立場に置かれているが、同時に、かれらは明白で否定できない社会的価値をもった仕事に取り組む人間に、いまにも爆発しそうな反感を募らせている。とはいえ、その体制が意識的に設計されたものではまったくないのはあきらかだ。それはほとんど一世紀をかけた試行錯誤のはてにできあがったものなのだ。だが、それこそ、わたしたちがそのテクノロジの能力にもかかわらず、一日あたり三、四時間労働をまったく達成していないことへの、ただひとつの説明なのである。

ある論考の仮説がその受容によって裏づけられることがあるとすれば、まさにこの事例がそうである。「ブルシット・ジョブ現象について」は爆発的な反響を生みだした。

皮肉なことに、小論が世に出てからの二週間というものの、わたしとパートナーは、たがいに何冊かの本だけをもって、ケベックの田舎にある山小屋ですぐすことにきめていた。わたしたちは、あえてインターネット環境のない場所を選んでいった。このため、わたしは結果を自身の携帯電話でしか見届けられないという、困った立場におちいつていた。その小論は、ほとんど間髪いれずに急速に拡散していた。数週間のうちに、ドイツ語、ノルウェー語、スウェーデン語、フランス語、チェコ語、ルーマニア語、ロシア語、トルコ語、ラトビア語、ポーランド語、ギリシャ語、エストニア語、カタルーニャ語、韓国語と、少なくとも一ダースの言語に翻訳され、さらにスイスからオーストラリアまで各紙に掲載された。掲載元である『ストライキ』のウェブサイトは一〇〇万ヒットを超えるアクセスデータを処理しきれずに、ひっきりなしにダウンした。いくつものブログ記事が投稿され、コメント欄はホワイトカラーの専門職の告白で埋めつくされた。そして、人びとは、わたしにアドバイスを求めるメールをくれたり、いまの仕事を辞めて、なにかもつと意味のあることを探すきっかけとなったと語ってくれた。ここに(わたしが何百と収集したうちの)ひとつの熱狂的な反応がある。オーストラリア「キャンベラ・タイムズ」紙の読者欄に投稿されたものだ。

よくぞいつてくれました！ わたしは企業顧問弁護士をしています(具体的にいうと、税務の訴訟人です)。わたしは、この世の中でなんの役にも立っておらず、いつも、まったく惨めな時間をすごしています。「それなら、どうしてそんな仕事をしてるんですか？」と、痛い質問をされるのがつらくてなりません。というのも、現実はそのほど単純ではないからです。わたしは、将来の子育てのために一軒家をシドニーに建てたいと考えています。そのために、一部の人間たちに大いに奉仕することが、はからずもわたしの現状と異なる唯一の道となっていました。テクノロジの進歩によって、われわれの二分分の生産性は、おそらく、かつての五日分に相当することでしょう。しかし、生産性のなかにある強欲と働き蜂の病によって、われわれは依然として、自分の願いの追求もままならぬまま、他人の利益のために奴隷のように働くよう強いられているのです。インテリジェント・デザイン(知性あるなにかが生命をデザインしたという説)や進化の存在を信じていようといまいと、人類は働くために生まれたわけではないでしょう。わたしにとって、こうした状況は、必需品の価格の高騰に下支えされた強欲の結果にすぎません。

あるとき、ひとりの匿名のファンからメッセージをもらった。そのひとは金融サービスのコミュニティ内部にその記事を配信したグループの一員であったが、配信したその日のうちに、そのひとつのもとには小論の内容にかんする五件のメールが届いたという(あきらかに金融サービスに従事する人間の多数があまりやることがないという、ひとつの例証である)。いったいどれくらい人間が、自分の仕事を本当にそのように感じているのかと

ット化にともなって、空疎に濫用される傾向にある。翻訳では、文脈を日本語環境と重なるかたちでかなり特定できるばあいは、その文脈に応じて日本語をあて、そうでないばあいはカタカナのまま使用している。これについても第五章の訳注2参照。

『ブルシット・ジョブ クソどうでもいい仕事の理論』 David Graeber 著

序章 ブルシット・ジョブ現象について

・ジョン・メイナード・ケインズの予測

20世紀までに、イギリスやアメリカのような国々では、テクノロジーの進歩によって週十五時間労働が達成されるだろう。

→テクノロジーの観点からすれば達成可能だが、ユートピアに終わってしまった

・産業構造の変化

工業・農業部門の減少

サービス業とりわけ管理部門の膨張

→金融サービス・テレマーケティング・企業法務・人材管理・広報など
＝ブルシット・ジョブ（定義・具体例は第一章と第二章）

・イギリスの世論調査代行会社 YouGov による調査

あなたの仕事は「世の中に意味のある貢献をしていますか？」

→37%がしていないと回答（50%がしていると回答、13%がわからない）

オランダにおける世論調査もまったく同様の結果（40%が自分の仕事が存在している
確固たる理由はない、と回答した）

◎本書での問い

①なぜ、利潤追求をおこなう企業が本当は必要のない労働者に大枚をはたいているのか？

②なにもせずに大金の支払われる立場や、他者にまったく益することがないと感じられる
立場に置かれると、人間がその状況を憂鬱で惨めなものと感じるのはなぜか？

③どのようにして、創造性とは苦痛をとまなうものだと考えられるようになったのか？
（なぜ社会や他者に便益を与えている仕事ほど報酬が少ないのか？）

第一章 ブルシット・ジョブとはなにか？

○ブルシット・ジョブの定義の深化

暫定的定義1＝ブルシット・ジョブとは、被雇用者本人でさえ、その存在を正当化しがたい
ほど、完璧に無意味で、不用意で、有害でもある雇用形態

暫定的定義2＝ブルシット・ジョブとは、被雇用者本人でさえ、その存在を正当化しがたい
ほど、完璧に無意味で、不必要で、有害でもある雇用の形態である。とはい
え、**本人は、そうではないと取り繕わなければならないように感じている。**

→欺瞞性と詭弁がかかわっていないものは排除（例：マフィアの殺し屋）

最終的な実用的定義＝ブルシット・ジョブとは、雇用者本人でさえ、その存在を正当化しがたいほど、完璧に無意味で、不必要で、有害でもある有償の雇用形態である。とはいえ、その雇用条件の一環として、本人は、そうではないと取り繕わなければならないように感じている。

→対価の払われる専門的職業でないものは排除（例：詐欺師・泥棒）

第二章 どんな種類のブルシット・ジョブがあるのか？

○ブルシット・ジョブの主要五類型

①取り巻き（フランキー）の仕事（封建的家臣）

→だれかを偉そうにみせたり、だれかに偉そうな気分を味わわせるという、ただそれだけのために（あるいはそれを主な理由として）存在している仕事

例：ドアマン・（ただ座っているだけの）フロント係

②脅し屋（グーン）の仕事

→その仕事が脅迫的な要素を持っている人間たち・自らの存在を他者の雇用に全面的に依存している人間たち

例：軍隊（他国が軍隊を要しているから必要＝軍隊をもつ者がいなければ無用）

ロビイスト・広告専門家・テレマーケティング・企業の顧問弁護士

・証言

広告産業の仕事とは、需要を捏造し、そして商品の効能を誇張すること

ひとを欺き、その商品を必要としていると錯覚させなければならない

・証言（コールセンターの従業員）

本当は欲しくも必要ともしないものを人びとに売りつけたり、保険の加入を勧誘したり、無意味な市場調査の契約をとりつけたりする

⇒脅し屋の核心は強迫性と欺瞞性

③尻ぬぐい（ダクト・テーパー）の仕事

→組織に欠陥が存在しているためにその仕事が存在しているにすぎない雇われ人

例：目上の人間の不注意や無能さが惹き起こした損害を原状復帰させることが仕事であるような部下

自動化されてこなかった仕事

④書類穴埋め人（ボックス・ティッカー）の仕事

→ある組織が実際にはやっていないことをやっていると主張できるようにすることが主要でないし唯一の存在理由であるような被雇用者

例：実際に最後まで目を通すものが一人もいない報告書をつくる仕事

経営者に権力や威信を表現するためだけにプレゼンテーションや書類をつくる仕事

データ分析家

⑤タスクマスターの仕事

以下二つの下位区分に分類

(1) もっぱら他人への仕事の割り当てだけからなる仕事

例：中間管理職

(2) 他者のなすべきブルシットな業務をつくりだす仕事（ブルシット生成装置）

第三章 なぜ、ブルシット・ジョブをしている人間は、きまって自分が不幸だと述べるのか？（精神的暴力について、第一部）

問い：ブルシット・ジョブについている人間はなにもせずに金を得ているにもかかわらず、なぜこんなにも本人たちは不幸に感じているのか？

要因の一つ：他人の最善の利益に反すると分かっているながら圧力をかけて欺いているため
→だが、これでは根本的な説明になっていない

働かずに大金がもらえるのならそれは無条件にうれしいことではないのか？

問いの背景には、なにもせず金を稼ぐ者は幸運であり、ひとがそのように考えるのは当然である、という想定があるが、それはなぜか？

↓

ホモ・エコノミクス（経済人）の想定に当てはまらない多数の領域の存在
仕事に関する公的な言説の数々の間違い

↓

人間とはどのような存在であるかについての基本的な真実＝人間とは、他の人間との関係から切り離されたら肉体的な崩壊が始まるほどに、本質的に社会的な動物

・ドイツの心理学者カール・グロース考察

「原因となる悦び（the pleasure at being the cause）」

→幼児はみずからが何事かを惹き起こし、出来事の原因を「自分」と認識することで、歓喜を覚えるとともに周囲と自分を区別する。そして、この気づきは以後のすべての経験の根源的背景としてとどまり続ける。

*権力を行使する目的・ゲームに熱中する理由

◎なぜブルシット・ジョブは人々に壊滅的な効果をもたらすのか？

→役立っているように見せかけていると同時に、役立っていないことも痛烈に自覚すること

で、わたしはわたしであるという根源的感覚が攻撃されているため
実存的な苦悩

○自分の時間を他者に貸し出す、という考えにどのように至ったのか

・時間とはなにかにかんする常識の変化

以前は、時間によって行為が測られるのではなく、行為によって時間が測られた

↓

14 世紀までにヨーロッパ各地に時計台が設置される

家庭用時計と懐中時計の登場（18 世紀後半＝産業革命到来期）

→時は金なり・時間を貨幣と引き換えに売買する・you're on my time

・道徳的側面の変化（神学・宗教的な教え→道徳→経済学）

ピューリタニズムの登場（用心深い時間のやりくりが道徳の本質）

ピューリタニズムの現代の変種（無意味な仕事でも従事せよ、なぜなら労働は道徳的自己
規律の一形式だから）

第四章 ブルシット・ジョブに就いているとはどのようなことか？（精神的暴力について、 第二部）

・前章の続き

ブルシット・ジョブを行っている人間

→世界や他者に予測可能な仕方で働きかけができるという実感を喪失・自分が丸ごと他者
の権力のもとにある（原因になれない惨めさ）

なぜ演技ゲームをしなければならないのか、なにを非難したらよいのか分からない（筋書
きの欠落）

◎社会学者リン・チャンサーの、日常生活におけるサドマゾヒズム理論

⇒ヒエラルキー的環境にある人々は、一般的に、一種の病理性をもったサドマゾヒズム力学
に封じ込められてしまう

⇒ボトムの間人は与えられることのない承認を求めて格闘し、トップの間人はますます支
配をふるう

*演技的なSMプレイと現実世界におけるサドマゾヒズム状況の違い

→上司に「オレンジ」とはいえない

何がセーフワードであるのか前もって監督者たちと取り決めできない

第五章 なぜブルシット・ジョブが増殖しているのか？

問い：資本主義経済市場において、なぜなにもしていないのに多くの人が報酬を与えられて
いるのか？

- ①資本主義がそのような結果をもたらしうること単に人々が拒絶しているため
- ②雇用の性質の変化について、根本から誤った理解を我々が発展させてきたため
- 第一次（農業）・第二次産業（工業）の衰退と第三次産業（サービス産業）の発展
- ⇒第三次産業の中でも情報関連の仕事の割合、特に FIRE 部門（金融（finance）、保険（insurance）、不動産（real estate））の割合が増加している。

○金融機関がブルシット・ジョブを創出している

- ・金融機関は、融資をおこなってマネーをつくりだし、それを持ちいて取引をするたびに少しずつあがりをいただいている。
- ・銀行員は自分たちの仕事が銀行全体にどのように貢献しているのか分かっていない
- ・たいていの銀行員はなににも有益なことをやっていないか、機会が容易くこなせないようなことはなににもやっていない。

○大企業の内部構造（封建体制）と古典封建体制

・類似点

経営者（領主）が、自分の部下が膨らむことに誇りを感じており、華やかさや威厳を維持するために取り巻きを形成すること

忠実な協力者（脅し屋）に報奨を与えて、潜在的な不満分子を買収したり、巨大ヒエラルキーを形成すること

・相違点

金融化された資本主義では、経営管理者たちからなるヒエラルキーは際限なく再生産される（古典封建制では、外部からの監督は最小限であった）

○労働者と雇用主の間の「ケインズ主義的妥協」の崩壊

1945年から1975年にかけては、労働生産性の上昇が労働者に対する報酬の上昇と必然的に結びついていた

⇔1970年代後半以降、労働生産性は上昇するが、労働者賃金は横ばい

→では、生産性上昇によって得られた利益はどこへいったのか

⇒1%の最富裕層、上位層の専門的管理者諸階級の資産の増大

+

無意味な専門的管理者・事務職員をつくりだすための費用

第六章 なぜ、ひとつの社会としてのわたしたちは、無意味な雇用の増大に反対しないのか？

新たな問い

① 私たちは自らの仕事なんらかの目的に奉仕するものであるとか何らかの意味を持つ

ものであると信じているし、仕事の目的や意味が見いだせなくなるとつまらなく感じてしまう。

⇒だが、そもそも仕事は価値をもつとはどのようなことなのか？

② 私たちの社会では、労働の社会的価値がその経済的価値に対して反比例している。さらに、多数の人がこの状況を道徳的に正しいと受け入れている。

⇒なぜこのような倒錯した事態が発生しているのか？

○ブルシット・ジョブが労働価値説に対して提起する問い

※労働価値説＝商品の価値はその存在を可能にするのにつぎ込まれた仕事である

例：パン一切れを買う＝麦を育て、パンを焼き、そのパンを包装し運搬するのにつぎ込まれた人間の努力に対して代金を払う

・主流派経済学の考え＝価値は究極的に主観的なものであり、任意の財やサービス市場が存在するならばそれがだれかにとって価値をもつことは自明であり、市場が存在する以上のことを知る必要はない。

⇒ブルシット・ジョブの存在が市場の無謬性を否定する・価値にかんする問題の曖昧さ

○話は価値論へ

・価値の区別

① 「価値 (value)」：対価が払われる仕事・金銭取得を主要な動機とする行動にかかわる人間の努力全般

② 「諸価値 (values)」：上記が該当しない (例：家事労働・子どもの養育)

・貨幣の導入によって「価値」は比較可能に (数量化できるように) なったが、「諸価値」は比較可能ではない

⇒商品と比較可能性によって経済的「価値」をもつ

「諸価値」はなにものとも比較することができないから価値がある

○再び問い②へ

・なぜ、他者の助けとなり他者に便益を提供する労働に与えられる報酬は少ないのか？

→とはいっても、他者に寄与するという客観的な尺度など存在するのか

思考実験：ある職業の人間がすべて消え去ったらどうなるか考えてみる

⇒看護師や教師・ごみ収集員・清掃員・バスの運転手などが消えてしまうと結果は壊滅的だが、政策コンサルタント・マーケティングの教祖・ロビイスト・顧問弁護士・金融機関で働く人などが消えてしまってもなんとも思われない。

後者こそが高給取り！

・有用性と報酬の間の反転した関係を立証した調査

① 米国の経済学者ベンジャミン・B・ロックウッド、チャールズ・G・ナタンソン、E・グレン・ワイルの論文

② イギリスのニューエコノミクス財団

⇒他者のためになる労働であればあるほど、受け取る報酬が少ないことを裏付ける

例外：医者、配管工、電気技師

○道徳哲学者ジェラルド・A・コーエン

ある人々が純粋に自らの意志で他の人たちよりも多く働いた

⇒その人物が働いた動機が利他的なのか利己的なのか立証しなければならない。

↓

前者の場合、生産された社会的富を不均等に分配することは彼らの目的に反する。利己的動機に動かされている人々に報酬を与えることだけが、道徳的に筋が通る。

↓

だが、人間の動機は揺れ動いているため、単純に利己主義者と利他主義者に分けることは困難である。となると、より大きな労力を費やしている人すべてに報酬を与えるか、そうしないかのどちらかになる。

↓

どちらの選択をしても、一方の人々の目的と対立する。すなわち、大きな対価を与えれば、利他主義者は社会に便益を与えようとする試みが挫かれる。そうしなければ利己主義者は自らに便益を与えようとする試みが挫かれる。

どちらかを選ぶとするならば、利己主義者を挫折させるべきだ。

↓

◎より大きな労力や生産性に対してより多くの報酬を与えるべきではない。

◎社会に便益をもたらすことを選んだ人々や、自らの仕事が社会に便益をもたらしていると自覚している人々は、内面的な報いをもたらされているのだから、高額な報酬を要求する権利はない。

○労働に対する態度の神学的起源とその変化

・古代ギリシア、ローマの労働観

(1) 労働は罰であり、仕事が善き人間をつくることはない(仕事=悪)

(2) 仕事は仕事それ自体を超えたなにごとかを創造するために行われる

(男性は土を耕し、女性は子供を出産する)

・中世の北部ヨーロッパにおける労働観

(1) 「ライフサイクル」奉公=ほとんどすべての人間が、みずからの仕事人生の最初の約7年から15年を、よその世帯の奉公人として仕えるものとされていた。

(2) 奉公人たちは報酬を得ていた。(賃労働の存在)

⇒仕事、とりわけ支払い労働は、人間が自己規律を持った大人に成長し、自立するために不可欠な役割を果たす（後のプロテスタントの労働倫理）

○資本主義の出現による労働観の変化

・資本主義の出現＝一時的であった奉公関係が生涯を通じた賃労働（労資）関係へと変化
→無数の若者が半永続的に社会的青年期に囚われるようになり、モラルパニックを起こすライフサイクル奉公の解体とプロレタリアート（「子供を産む人々」という意味のラテン語が語源）の出現

・ピューリタニズム

自立した大人になることを保証できなくなったため、代わりに、慈善、規律、新しい神学の普及を行った。

⇒仕事は罰であり、贖罪である。仕事とはみずから進んで行う苦行であり、それ自体に価値がある。生産する富をはるかに超えた価値であり、神の恩寵である。

・トマス・カーライル 仕事の福音

→労働は生の本質、真の労働は全て神聖である。

もし仕事が高貴なのであれば、最も高貴な労働には報酬を与えるべきではない。なぜなら、かのような絶対的な価値に値段をつけるなど実に低俗だからである。

○労働価値説の欠陥

アメリカにおける南北戦争直後の消費主義（これまでの生産者主義の否定）と官僚制的資本主義の勃興

→富の生産者とは労働者ではなく資本家である

・労働価値説の欠陥＝焦点を「生産」のみに集中した点

→労働者階級の仕事におけるケアリングの側面（ひとの世話をする、ひとの欲求や必要に配慮する、上司の望むことや考えていることを説明する。確認する、予想する等々）が抜け落ちていた

◎「近代的仕事の逆説」

労働者はみずからの仕事を、自己否定、つまり、ある種の世俗的苦行として捉えた。だが、同時に仕事を望んだ。なぜなら、仕事は人間の人格形成に決定的な役割を果たしていることを彼らは知っているためである。また、仕事を失うことは、仕事によって購入できるものを失うばかりではなく、みずからの自己を規律し尊重する能力を失うことでもある。（第三章）

ブルシット・ジョブが増殖しているのは、経営封建体制の特異な性質ゆえである。ブルシット・ジョブが惨めさを生み出しているのは、世界に影響を与えているという感覚のうちに、つねに人間の幸福が織り込まれているため。

第七章 ブルシット・ジョブの政治的影響とはどのようなものか、そしてこの状況に対してなにをなすのか？

○ベーシックインカム

- ・ベーシックインカムの究極の目的は生産を労働から切り離すこと

→政府のほとんどの部署が不要となり、官僚制の規模の大幅な縮小が実現する

※グレーバーは、自身がアナキストであると述べ、国家の完全な解体を望んでいると本書には書かれている。

※人間は強制がなくとも労働をおこなう、ないし、少なくとも他者にとって有用ないし便益をもたらすと感じていることをおこなうだろう、という想定（第三章の議論）

○ベーシックインカムの効用

- ・ヒエラルキー的労働組織のサドマゾヒズム的力学の解体

問題は、サディズムの力学はすべて、経済的ダメージを感じさせることなく「辞めてやる」と上司に対して言えないことにある

⇒ベーシックインカムは、労働者に上司に対して「オレンジ」という権能を与える

（ここでグレーバーは、たった2頁であるが、フーコーの権力論について言及している。フーコーは権力を「戦略的ゲーム」とであると定義し、あらゆる人々はずねに戦略的ゲームをプレイしていると述べた。また、彼は権力と支配をどのように区別するのか、はっきりと述べていない。だが、ここでフーコーは権威主義的な学者の専制（支配＝悪）に対して、教師と学生の相互的影響関係の事例（権力＝善）（これは以前、私が教授に質問を投げかけたことでもある）を引き合いに出している。なぜここでフーコーの権力論に言及したのか、また、支配と権力はどう違うのか（固定的・流動的？）について伺いたい。）